

酒井健太郎『アリストテレスの知識論』書評

岩田 直也

1. はじめに

ジョナサン・バーンズ (Barnes, J., 'Aristotle's Theory of Demonstration', *Phronesis* 14, 1969, 123–52.) は、『分析論後書』の目的について、完成した「(学問的) 知識」(エピステーメー) が論証という構造をもつことを示すことである、と論じた。以来、デイヴィッド・チャールズ (Charles, D., *Aristotle on Meaning and Essence*, Oxford University Press, Oxford, 2000.) やデイヴィッド・ブロンシュタイン (Bronstein, D., *Aristotle on Knowledge and Learning: the Posterior Analytics*, Oxford University Press, Oxford, 2016.) らがバーンズへの反論として、この著作が「知識」を獲得するための探求及び学習の方法論も含むと論じてきた。酒井氏の新たな著書は、これらの流れを踏まえるもので、『分析論後書』を論証論と探求論の二つが融合したものと捉えることにその解釈の軸がある。したがって、本来であればそれら論証論と探求論の両側面から検討すべきであるのだが、紙幅の都合上及び探求論により特徴的な解釈が展開されていると思われる理由から、この書評は酒井氏の探求論のいくつかの論点に焦点を絞り論じることにする。

2. 幾何学的分析法について (第1章)

酒井氏は「序論」において「アリストテレスが数学における分析と総合を探求と論証に置き換えることによって、より広範囲に適用可能な方法論を想定していた」(p. 12) と述べている。そのため、幾何学的分析法、とりわけその「分析」過程、の理解がアリストテレスの探求論を考えるうえで重要であるが、それを論じた第1章はいくつかの問題を含んでいると思われる。

まず、幾何学的分析法とは、探求者がある幾何学的問題を解く(証明する)ときに、その解法(証明方法)が直ちに思い浮かばない場合、その出発点となる前提及びそこからの大体のプロセスを発見するために用いる方法である。その方法論を記述した最古の資料である紀元後4世紀のパッポス『数学集成』第VII巻冒頭部によれば、幾何学的分析法は「分析」と「統合」という一対の過程から構成される。そして、「分析」とは与えられた問題が解けた(命題が正しい)と仮定し、そこから推論を行いその前提に到達する過程である。対して「統合」とは、そこで到達した前提からおおむね反対の推論を行い当初の問題を解く(命題を証明する)過程である。

この幾何学的分析法における「分析」過程の推論が演繹的なのかそうでないのか議論になっている。すなわち、問題の結論をC、その前提をPとすると、「分析」とは

- (1) Cからの論理的な帰結としてPを求めるのか ($C \rightarrow P$)
- (2) Cがそこからの帰結となるようなPを求めるのか ($C \leftarrow P$)

という二つの可能性が考えられ、解釈が分かれている。酒井氏は「中項を発見することが分析の役割なのであるから、先の選択肢のうちでは(2)を採用しなければならない」と述べている (p. 23, n. 10)。その上で、この方法論の詳細な検討のために必要であるとの理由で、パッポス『数学

集成』第 VII 卷命題 107 における幾何学的分析法の実例を紹介している。しかしながら問題は、この命題の「分析」過程の推論が、明らかに (1) の仕方で行われていることである。すなわち、推論の詳細はここで省かざるを得ないが、パッポスはここで要求された作図が完成したと仮定し、そこから演繹的な推論を行うことで、証明の前提に到達しているのである。確かに、ここでの結論 C と前提 P の関係は、その他の多くの数学の諸命題と同様、 $C \rightarrow P$ だけでなく $P \rightarrow C$ も成り立つ。しかし、あくまで「分析」過程の推論ということで考えれば、(1) の推論の方向が正しいと考えられるのである。(2) が正しいければ、ある問題を解決 (命題を証明) する際に、どういう前提から始めればよいか、単に考えることと何ら違いはない。そもそも、それができないから、何か特別な方法が必要とされたのである。

次に、アリストテレス自身もまた「分析」過程を (1) の仕方理解していたと思われる。以下の引用は、酒井氏がアリストテレスの「分析」概念を理解する上で参照するテキスト (T1) の該当部分を抜き出したものである。

「偽 [である前提] から真 [である結論] を証示することが不可能であったとすれば、分析することは容易であったろう。というのも、それらの事柄 [前提と結論] は必然的に置き換えられえただろうからである。A があるとする。それ [A] があるとそれらの事柄がある (τούτου δ' ὄντος ταῦτι ἔστιν)。それらがあることを私は知っている。これらの事柄をたとえば B とする。そうすると、これらの事柄 [B] から出発して、かの事柄 [A] があることを私は証示するだろう。」(APo I.12, 78a6–10)

酒井氏はここでの論点を「結論を分析しても必ずしも真である前提が導かれるとは限らないため、分析とは容易に達成できるものではない」としている (p. 22)。先の「分析」過程の解釈と合わせると、結論 A が真であるとして、それを演繹的に導くような前提 B を発見したとしても、その B が真であるかわからないため、「分析」が難しいということだろう。しかしながら、引用テキストでは「それら [B] が [真で] あることを私は知っている」と述べられており、これは「分析」過程が既知の前提で終わるという意味であり、「前提 B が真であるかわからない」ということはここでの議論に関係がない。また、「分析することは容易であったろう」ことの理由として「それらの事柄 [前提と結論] は必然的に置き換えられえただろう」ことが挙げられているが、その理由が酒井氏の解釈によればどのような意味なのか不明になってしまうだろう。

ここでアリストテレスは「それ [A] があるとそれらの事柄 [B] がある」(τούτου δ' ὄντος ταῦτι ἔστιν) と述べているが、この絶対属格は A から B を演繹的に導くことを示す際に用いられ (cf. II.11, 94a20–33)、上記 (1) の選択肢が正しいことを示唆している。この読み方に基づくと議論のポイントは「A から B が演繹的に導かれ、B が真だと知っている場合、もし仮定によって偽から真を導けないとすると、その時点で直ちに A が真だと判明する」ということだろう。つまり、A と B が同値 (必然的に置き換えられる) であれば、A から B が導かれさえすれば、逆に B から A を論証する「統合」過程が必要なくなる、ということだ。したがって、「分析」過程自体が容易になるというよりは、「統合」過程が不要になることで、どのように結論を論証するかというより広い意味での分析が容易になるという趣旨の内容をアリストテレスが述べているのだと思われる (cf. Ross, W. D., *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, Clarendon Press, Oxford, 1949, 548–50.)。しかし実際には、A と B が置き換え可能かはわからないので、「分析」過程で A から B が導けたとしても、実際に B から A が導けるか、また、その「統合」過程は「分析」過程を大体逆方向にした仕方で行うことができるのか、改めて考察する必要があるわけである。数学では A と B が直ちに置き換え可能な場合が多いが、必ずしもそうとは限らない。だからこそ、「統合」する際に、ディオリスモスと呼

ばれる、問題を解く（証明する）ための必要条件を考慮する必要が出てくるのである。（ディオリスモスの役割については、Saito, K. and Sidoli, N., ‘The Function of Diorism in Ancient Greek Analysis’, *Historia Mathematica* 37, 2010, 579–614 に詳しい議論がある。）

このようにアリストテレス自身も幾何学的分析法の「分析」過程が「結論からその前提への演繹的な推論である」ことを想定しているとしたら、これが「結論からその前提へ」という単なる推論の方向性を示すこと以上に自然学などのその他の学問に対してどのような探求方法のモデルとなっているのか疑問に思われる。例えば、『分析論後書』では「月の光が欠如する」という事実を論証するために、「太陽の光を地球が遮る」という原因が持ち出されるが、前提となる後者は結論となる前者から演繹的に導き出される事柄ではない。酒井氏は、『分析論前書』第1巻第28章を参照しながら、先の結論の主語にあたる「月」と述語にあたる「光の欠如」それぞれに結びつきうる諸性質を収集し、それらの関係を考察することで論証の中項を発見する、という「分析」過程を論じている（pp. 33–5）。この議論は、アリストテレスの探求論を理解する上で、確かに重要だろう。しかしながら問題は、それがこれまでに見た幾何学的分析法とは、論証の前提を発見するという基本的な目的を除いて、かなり異なる方法論に思われることである。そうであれば、アリストテレスの探求に関わる方法論は、そもそも幾何学的分析法とは無関係なのではないか、という疑問にどのように答えられるだろうか。実際に、アリストテレスは「分析」という言葉を、前提を発見するという意味では、幾何学の関わる限られた箇所ではしか用いておらず、上記のような探求一般の場面では一切用いていないのである。

さらに、酒井氏も言及するように（pp. 32–3）、『分析論』において登場する「分析」という語の典型的な意味は、個別的な推論を基本的な推論形式（またはある推論形式をその他の推論形式）に還元するというものである。この推論の還元分析の用法は、上に見た「結論からその前提へ」という幾何学的分析法とは、全く異なる「分析」概念に基づいているように思われる。私自身、アリストテレスの探求論の背景に幾何学的分析法が存在する、という酒井氏の基本的立場に決して反対な訳ではない。しかしながら、この立場を説得的に示すためには、上記の疑問に何らかの仕方で答える必要があると思う。

3. アリストテレスの探求論について（第7～9章）

アリストテレスが『分析論後書』において論じる探求とは、酒井氏によれば、(a) ある事柄の事実（「Xという事実」）をまず把握し、(b) その原因（「Xの根拠は何か」）を考察するという過程である。これは、(c) 探求対象の部分的定義（Xがあるかどうか）をまず把握し、そこから(d) その対象の真の定義（「Xは何であるか」）を考察する、という過程に対応する。本書の特色は、この探求プログラムの内実を明らかにしていく上で、「専門家」とそうでない「素人」の対比を導入して説明を進めているところにある。この節ではその対比を中心とする探求プログラム全般に関して、いくつかの疑問を取り上げて論じていくことにしたい。

酒井氏は、第7章を通じて、(a) – (b) の探求系列と (c) – (d) の探求系列を区別する必要性を強調している。しかしながら、両者の探求系列が本当に区別されているのか、また、そもそもなぜ区別されるべきなのか明確であるとは思われなかった。例えば、月蝕という事態は(a)と(c)どちらの仕方で探求されるが、前者では「月は蝕を受けるか」という問いとなり、後者では「月蝕はあるか」という問いとなる、とされる。その上で、このように文脈によって異なる問いの立て方があり、それはアリストテレスが言語の使用に深い関心を持っていたことを示している、と論じられる（p. 140）。けれども、このことを科学的探究という事柄自体に即して考えれば、どちらの問いも単に「月蝕という事象を把握し、そこからその原因を把握する」という同じ内容を表

しているだけではないだろうか。この問いの立て方の違い自体が、単なる言葉の問題を超えて、探求プログラムの内実にはどのような違いを生んでいるか、まず明確ではないように思われた。

続く箇所において酒井氏は、両系列の探求方法の違いについて、(a) の考察は専門家による対象のデータ収集に基づき、(c) の考察は専門家による対象の名前の意味内容の理解に基づくと主張している (pp. 140–50)。しかしながら、(a) と (c) の考察方法はそのようにはっきりと区別できるのだろうか。例えば、(c) の探求では、対象の部分的定義を把握することが問題になっているが、そこでは (a) のようにその対象に関するデータ収集が役立つ (もしくは必要である) と考えられる。このことは、(c) から (d) へと探求を移行する際に、当該対象の諸性質を収集していることが、その対象の本質的性質が何であるのか考察する (d) において重要な役割を果たすだろうことから言える。また逆に、(a) のある事象を事実として把握する探求においても、(c) の考察と同様に、その事実に対応する命題のそれぞれの項の意味内容について基本的な正しい理解をもつ必要があるだろう。というのも、(b) の探求は、それらの項の主語項及び述語項の収集に関わっているとされているからである (pp. 143–4)。

次に、専門家と素人との対比について述べたい。(a) の探求についてその方法が経験的なデータ収集に基づくという解釈は上に検討したが、酒井氏はそのデータ収集が素人によるものではなく専門家によるものでなければならない、と強調して論じている (pp. 140–5)。そしてこの論点は、T36における「天文学上の経験が天文学の知識の出発点を与えるということであり (というのも、現象が十分に把握されたときに、それによって [はじめて] 天文学の論証が発見されたからである)、このことは他のどのような技術や知識についても同様である」(Apr. I 30, 46a19–22) という言明に示されている、と主張する。天文学の場合で言えば、天文学者による経験的データが天文学の出発点を獲得するために必要であることになる。しかしながら、この解釈を T36 に読み込むことは非常に困難であると考えざるを得ない。「天文学上の経験が天文学の知識の出発点を与える」という言明で意図されていることは、例えば「天文学の知識の出発点は動物学に関する経験ではなく、天文学に関する経験にある」といった仕方で、それぞれの学問の出発点がそれに固有の経験にあるということに過ぎないだろう。確かに、続く記述ではその「現象が十分に把握されたとき」という条件が付け加えられている。けれども、ここに天文学者とそれ以外の素人のデータ収集法の相違を読み込むことはあまりにも唐突であり、その条件のポイントも「現象の経験が十分に蓄積されれば」といったより一般的な意味以上の内容は引き出せないように思われる。

また、(c) の探求における専門家と素人の対比も疑問を呼び起こさせる。酒井氏によれば、(d) における「Xは何であるか」という問題を解明するために、(c) の段階において専門家がXの意味内容を理解することが重要である (pp. 145–9)。その際に、具体例として挙げられているのが、専門家による「月蝕は光のある欠如」という理解である。(ここでは (c) の探求段階であり、その段階では専門家も「ある欠如」がどのような欠如であるか把握している訳ではない。) この専門家の「月蝕」の理解に対し、素人はそれについて「部分的定義ではない緩い意味内容しか持っていない」とされる。しかしながら、(c) の段階では専門家も「月蝕」について「月の光が何らかの仕方で欠けること」としか理解していないのであれば、それは天文学者でなくとも並みの知性を持ち合わせた人間であれば誰でもちょっとした観察から理解できることではないだろうか。また、アリストテレスは「雷鳴」について、それが「雲の中のある音である」という理解を原因探求の出発点においていると思われるが、この事象自体も一般の素人が雷鳴を観察したら、直ちに把握できることなのではないだろうか。少なくとも、このような例に即して考える限り、ここでの専門家と素人の対比は説得的とは言えない。

さらに、両探求系列に共通するより根本的と思われる問題は、そもそも、問題となっている諸事象の把握から、それらの原因 (及び第一原理) にまで遡って把握し、そこから論証を行うこと

でそれらの「学問的知識」が得られ、その領域に関する専門性をもつことになると言える点である。すなわち、酒井氏の解釈は、探求が終了して初めて専門性を得られるにも関わらず、その専門性を探求開始に要求する、という循環論法を犯しているように思われるのである。(この問題は、p. 193, n. 51 に述べられているように、酒井氏が第9章の論考を学会で発表された際に、口頭にて質問した事柄と重なる。)ここでのアリストテレスの議論が、既に第一原理を把握した専門家による、同一領域の新たな諸事象についての探求場面に関わっている、と考えれば上記の循環論法の問題は避けられるかもしれない。しかしながら、上で引用した T36 のテキストは「天文学の知識の出発点を与える」ことが問題になっており、それを既に把握した専門家がそこに想定されているとは思えない。したがって、それぞれの領域の出発点をまだ把握していないのなら、それはその領域の専門家とは言えないのであり、素人との区別はその段階では生じないのである。

なお、専門家による (a) と (c) における探求結果のみが (b) と (d) における原因探求の出発点となるという解釈は、次の第8章で酒井氏が論じる「アリストテレスの楽観的真理観」の考え (pp. 166-9) とも整合的でないように思われる。というのも、典拠となる T42 では「それぞれの人は自然について何かを語っており」(*Metaph. a* 1. 993b1-2) と述べられている。この記述は、むしろ、専門家ではない素人であっても探求対象の何らかの真理には到達できることを示唆している。もちろん、完全なる真理には誰もが到達できるわけではないのだが、それは「全体を持って、その部分を持つことができない」(b6-7) からだとされ、酒井氏は、『自然学』I 1, 184a10-16 を参照しながら、その「部分」が「原理」及び「原因」のことだと注意している (p. 167)。もしそうであれば、この「楽観的真理観」もまた、多くの人(素人)が事実・事象の把握は容易にできるが、その原因・原理の把握までは容易にできない(それをできる人が専門家と呼ばれる)ということを示していることになるだろう。

最後に、本書第9章で扱われている『分析論後書』第2巻第19章に関する論点との関連も指摘しておきたい。ここでは、ある学問領域に属する諸々の対象の個別的事例を感覚知覚することから始まり、それらを包摂する諸々の種、そしてさらにそれらを包摂する最上位の類を順に把握することで、学問の基礎を形成する帰納推論の過程が論じられている。その探求論とは、酒井氏の解釈によれば、そのような学問の基礎に置かれる類の把握自体は専門家でも素人でも可能であるが、その把握の仕方に違いがある。すなわち、専門家はその学問の基礎となる類を当の学問の原理として捉えそれを使用できる仕方で把握しているが、素人はそのような仕方で把握できない、というものである (pp. 191-4)。このように酒井氏は、素人でも経験から把握できる類の卑俗的概念と専門家がそこから学問を始める類の学的概念との間にあるギャップを解消しようとするのである。しかしながら、「基礎となる類をその領域の学問の原理として捉える」とは、より具体的には、いったいどういう把握の仕方なのだろうか。それぞれの専門家は自らの領域の学問的基礎となる類を把握した後、それをを用いてその類に属する様々な事象を論証していくのであるから、それらの諸事象に対して適切に説明を与えうるかという観点からその類の把握の正しさを検証できるかもしれない。けれども、この解釈方針は先立つ Kosman に対する反論の中ですでに斥けられてしまっている (pp. 185-7)。専門家が「基礎に置かれた類を原理として使用する」とは、その類に属する諸事象に照らした検証という内容以外に、どのような可能性があるのか本書では明示されていない。

また、学問の基礎に置かれた類の把握それ自体については、専門家でも素人でも達成できるという論点にも疑問が残る。この考えに基づけば、知性が第一原理を把握するその内容自体は、素人が経験から類を把握する内容と同じであるが、何故それが「学問的知識」よりも精確なものであり得るのか問題が生じる。この問題に対して酒井氏は、「原理の精確性を説明することはそれぞれの学問の専門家の役割でもソフィストの役割でもないため、その説明を『後書』に求めること

自体が誤っていると述べることができる」(p. 193) と回答している。その際に「幾何学の原理については、幾何学者は幾何学者としては説明を与えるべきではない」(Apo. I 12, 77b5-6) というテキストが典拠として挙げられているが、これは「幾何学者は自らの第一原理を論証する必要はない」ということだけであって、幾何学者が自ら立てる第一原理が適切か考察する可能性を排除しないだろうし、『後書』の議論はそもそもそれぞれの専門領域の枠組み内部に縛られるものでもないだろう。また、実際問題として、例えばユークリッド幾何学では「点とは部分のないものである」、「線とは幅のない長さである」といった定義が第一原理として措定されているが、これらは果たして素人誰もが経験から帰納的に到達しうる内容なのだろうか。第一原理の把握の問題は、例えば、エンドクサを検討する仕方各学問の原理に迫っていくという『トポス論』第一巻で述べられる「対話法」の方法など、より広いテキストの分析から複合的に再検討する必要があるだろう。

以上、ここでは書評という性格上、批判的な論点ばかり取り上げることになってしまったが、それらは本書の多岐に渡る優れた論考のごく一部に過ぎないことを最後に注意しておきたい。『分析論後書』は、アリストテレスの著作のうちでも、最も論争的で解釈の困難な著作の一つである。本書は、これまでの錯綜した先行研究を手際よくまとめ、その上で論証論と探求論を統合する仕方での著作の新たな全体像を示す本邦初の研究書である。今後『分析論後書』を日本で本格的に研究しようとする誰もがまず参照すべき書物となることは言うまでもない。